

I 虐待をめぐって

行動の脳科学からみる子育てとその問題

理化学研究所脳神経科学研究センターチームリーダー

理化学研究所脳神経科学研究センター研究員

黒田公美
白石優子

対応が難しい子ども虐待事例には、得てして貧困や国籍の問題とも関連の深い社会的孤立、複雑な家庭のヒストリー、子どもの発達特性、親自身の生育歴やメンタルヘルスなど、問題が数多く絡み合っていて、どう解きほぐしてよいかわからないような場合が多いものです。そのような状況であっても、親自身の生きづらさをくみ取るようなグループ療法や、当事者の家族全員が参加して子どもの安全について話し合うアプローチの有効性が示され、家族が自らの力を発揮して変わっていく姿を見ることができるところもあります (Turnell & Essex, 2006, 2008; 森田, 二〇一八)。

どこにでもある子育て困難が、発展して虐待

伝達されます。脳は、ニューロン同士がつながって作る巨大なネットワークとも表現されます。人間から魚に至るまで、脳はおおまかにいうと、大脳、小脳、間脳、脳幹というパーツからできています。それぞれのパーツの中にはさらに細かい領域に分かれ、それぞれの領域には異なる役割があります。たとえば大脳皮質は視覚野、聴覚野、運動野というように、扱う情報の種類

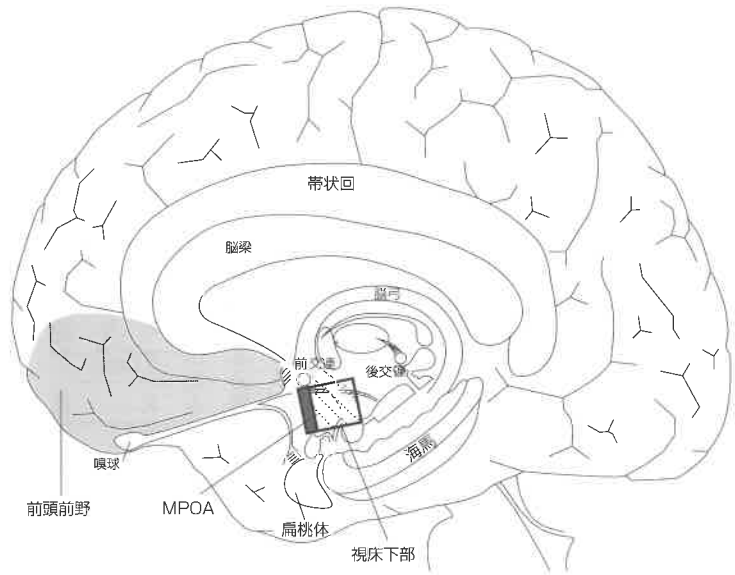


図1 矢状面でみたヒトの脳

です。前頭前野は脳血管障害や交通事故などのような働きが重要であると考えられます。前頭前野は、ヒトで顕著に発達している領域です。夜中に子どもの泣き声に苛立つ感情が生じながらも、怒りを抑え、冷静を保って子どもの世話をするときには、このような働きが重要であると考えられます。前頭前野は脳血管障害や交通事故な

にまで至ってしまう場合とそうでない場合があるのはなぜなのか？ 生育歴上の困難が、どのようにして虐待の連鎖などの後の問題へのリスクを高めるのか？ さらにどのような支援がどのような場合に有効なのかなど、多くの疑問が残されています。問題を整理するために、少し引いた見方ではありますが、本稿では行動の源泉である「脳」について考えてみたいと思います。そもそも人間は哺乳類であり、哺乳類は必ず子育てをします。子どもは親に愛着し、親との関係の中で基礎的な社会性を学びながら大きくなります。こうした哺乳類特有の親子の行動は、当然ながら哺乳類特有の脳のメカニズムによって支えられています。人間にも共通する動

がおおまかに区別されています。また、視床下部と呼ばれる(図1)脳の奥にある領域は、摂食行動や睡眠、性行動、攻撃行動、逃走などの基本的な本能行動を司るそれぞれ異なる脳領域を含んでいます。食えることと眠ることが同時にできないように、これらの基本的な行動は互いに競合し合い、力関係に応じて一時に一つが選択されると、しばらくのあいだは他の行動が抑制されるようになっていきます。

どで損傷を受けやすい脳部位でもあり、この部位の機能が障害されると、社会行動障害や衝動性制御の問題を含む高次脳機能障害をもたらす場合があります。

2 子育てと子への攻撃に関わる脳部位

子育て行動にもっとも大切な脳部位は、視床下部の前方にある内側視索前野 (Medial preoptic area, MPOA) と考えられます (Numan, 1974; Tsuneoka et al., 2013) (図1)。マウスの実験では、MPOAの中心部の機能を抑制すると、出産の経験のないメスだけでなく、健康に子どもを育てあげた経験のある母親でさえ子育てをしなくなり、噛みつくなどの子への攻撃行動が見られました。一方、性行動や出産、運動、摂食などは正常に行うので、子育て行動のみが選択的に障害されているといえます。

他にも、中隔や帯状皮質、海馬などの機能が抑制された動物では、子育てがうまくできなくなります。しかしこれらの動物の行動を観察すると、子どもをくわえてぐるぐる回るなど、子育てをしたい気持ちはあっても、具体的にどうすればよいのかわからないように見えます。

物の親子の脳の働きについて理解することで、人間がどのように環境から影響を受けたり、また自分自身の行動やまわりの環境を変えていくように学習したりするのかについて、理解が深まると考えられます。

1 脳と行動の関係

子育てや虐待を含むあらゆる人間の行動は脳の働きによって生じています。それは、「頭を使う」と表現されるような高度な活動(意識や思考、計算など)だけでなく、摂食、睡眠、排泄、体温調整、歩行のような運動、姿勢制御など生存に重要な基本的な営みも、また気分や感情も、基本的には脳の働きに依存しています。

脳の基本構成単位は、神経細胞(ニューロン)という長い突起を持った細胞です。一つのニューロンは外界や隣のニューロンから情報を受け取ると興奮し、突起を介して次のニューロンへと情報を伝えます。情報を伝えるニューロンとニューロンの近接部位はシナプスと呼ばれます。このシナプスにおいて、情報の送り手のニューロンから出る化学物質(神経伝達物質)が次のニューロンに受け渡されることによって情報が

従って子育てをする意欲の源泉はMPOAであり、中隔や帯状皮質はその下流で、具体的な行動計画に関わると考えられます。

一方、交尾未経験のラットやマウスは子どもを避けたり攻撃したりすることがあるのですが、それには扁桃体やその一部である分界条床核という脳部位が関わっています (Fleming et al., 1986; Tsunooka et al., 2015)。扁桃体は自己に対する脅威・危険を検知する機能を持ち、特に不快な刺激によって活性化します。マウスでこれらの脳部位の機能を抑制すると、子に対する回避反応や攻撃行動が減少しますが、子育てには影響を与えません。(攻撃行動に必要な脳部位は他にもあります。興味のある方は、黒田 & Memno, 二〇一七・篠塚ほか、二〇一七参照)。

人間からマウスまで、誰の脳にもMPOAや扁桃体があります。つまりどの人の脳にも、子育てをするための部位や、怒ったり叩いたりする行動を促進する脳部位があることになり、人によって行動が異なるのは、子育ての脳部位と怒ったり叩いたりするための脳部位の間の力のバランスが異なるためと考えられます。逆に力関係が変われば、行動が異なってくる可能性も十分あります。だからこそ、人間は時々矛盾した行動をしたり、あとで後悔をしたりするこ

ともあるのです。

3 経験による脳内回路の調整 II 学習

また大切なことは、ここまで書いてきたような行動の元になる脳の働きは、それが本能的な行動であつてさえ、生まれつきすぐにできるものではないということです。コップで水を飲むこと、二足歩行などのように基本的な行動でも、あつても、赤ちゃんははじめはうまくできず、練習してできるようになります。これは脳の配線が経験によって調整され、次に同じ経験をするときにはより効率よく情報伝達ができるようになることによるものです。もう少し具体的にいうと、ある行動をするとき、ニューロンが活性化すると、そのニューロンと情報の受け渡しをしたニューロンとの間のシナプスが、物理的に大きくなり、あまり使われなかったシナプスは小さくなります。それによって、次に同じ経験をするとき、無駄なく情報伝達ができるようになります。このようにして、日常のさまざまな出来事を含め、あらゆる「経験」は脳の中でシナプスの形の変化のように、何らかの物質的な変化として脳に蓄えられます。読者の方が、

こうして本や雑誌を読んで覚えた知識も、その人の脳の中の分子発現の変化やニューロンの形の変化に姿を変えるのです。その内容はまだわかっていませんが、不思議です。

性行動や子育て行動のようにより複雑な行動になれば、動物でもはじめてのときはうまくいかないことが多いのです。特に霊長類において、子育てのように高度な社会行動ができるようになるためには、三種類の経験(黒田ほか、二〇一六)が必要であると考えられています。一つ目は、自らが社会的な環境の中で適切に育てられる経験です。「その生物にとって期待できる平均的な環境」が与えられなかったために育児放棄をすることは、動物園で孤独に育った類人猿などでは半数以上にのぼるといわれています。二つ目は、子育てをしている個体を見たり、そのまねごとをしてみる経験です。社会的孤立状態や群れでの社会的経験の剥奪は、その種に標準的な社会行動を身につけることを困難にします。三つ目は実際に子育てのいろいろな要素を自分でやってみる経験です。動物でも、初産の子はうまく育てられずに育児放棄してしまうことが珍しくありません。はじめての出産による母子の身体的負担、また経験不足がその要因と考えられます。しかし初産時に育児放棄した親

でも、次の子は正常に子育てすることが多いものです。

このように、脳が健康に形成されていても、その中の回路の成熟には「経験」が必要です。はじめて子育てをするマウスでは、MPOAだけでなく中隔や帯状皮質のニューロンが強く活性化します。しかし子育てに慣れてくると、次

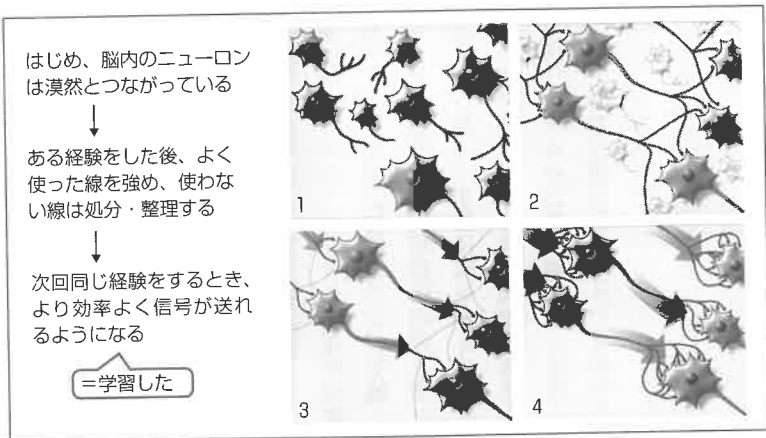


図2 経験=脳の可塑的变化による配線の調整

出所: © Joe Lertola (TIME) "Wiring the brain" より改変

第に活性化の程度は弱まります。このことが、慣れてくるとその行動がより楽にできるということの物質的な実体であるといえます(図2)。

動物でも子育てができなくなる要因として、①脳の回路の問題、②経験不足による脳内回路の調整不足、という二つの場合について述べてきました。しかし、そのような状態の脳で必ずしもいつも虐待が生じるわけではありません。一つの機能が弱い場合、たとえば視力が低いとき、聴覚や触覚を研ぎ澄ませてその機能を代替するようになり、様々な脳の機能には他の機能で補えることもたくさんあります。脳内でも実際にこのような機能の代償が見える形で起こります。特に大脳皮質はその時々状況に合わせて変化し機能を補う能力(可塑性)が高いのです。人間は哺乳動物の中でもっとも大脳皮質が発達しており、過去の失敗などの経験によって学習する能力も高いのです。ですから脳だけを見て、その人が虐待をしそうかどうかなどと判断することはできませんし、すべきではないでしょう。ただ、もし脳にある特性がはっきりすれば、それに応じた支援を選ぶことも容易になるのではないかと考えられます。レットルを貼るためではなく、支援に役立てるために脳科学的知見が役立てられればと思います。

4 適応的な養育放棄

脳にも生育環境にも問題がなくても、自然界では環境が厳しすぎるために子どもを育てられなくなる場合もあります。たとえば親自身の病気や飢饉などで、子育てが放棄されることがあります。厳しい条件の中での子育ては諦めて、次の機会に備えるわけです。また育てられる子の数以上の子が生まれた場合や、子が生存の見込みが低いほど発達が遅れているような場合があげられます。この場合、その子どもは諦め、他の子どもに資源を温存するということが野生生物としては適応的な行動として行われます。もちろん、恵まれた現代の人間社会においてはそのような理由で子育てを放棄することは許されませんが、親だけでは無理な場合がどうしてもあります。このような場合、社会から親子への手厚い支援が必要になります。

5 生育歴の困難がその後の行動発達に与える長期影響

不適切養育に至ってしまう親には、しばしば

自分自身が虐待を受けて育った経験があることが臨床的にはよくみられます。重度虐待で有罪となった事例に対する私たちの調査では、約七二%の加害親に一般の親の平均の二標準偏差を超える被虐待体験がありました (RISFEX「養育者支援」報告書参照)。

逆方向の検証として、乳幼児期に身体的虐待またはネグレクトを受けた人達の追跡調査も重要です。これまでの研究では、年齢・性別・人種および家族の社会経済的状況をマッチさせた対照群と比べ、犯罪に關与するリスクが増大するという報告が多くみられます (Egeland et al. 1988, Ertem et al. 2000, Widom, 1989)。たとえば米国司法省の調査で、明らかでない虐待と認知された一五七五事例の子がその後二五年間にわたりフォローされました。そして不適切養育を受けた子はそうでない子に比べ未成年での補導率が五九%、青年での逮捕率が二八%、暴力犯罪に關わる率が三〇%増加しています (Widom & Maxfield, 2001)。虐待の種別が身体的虐待の場合とネグレクトの場合で暴力的犯罪に關わる率は変わらないので、暴力を受けたことが単純に暴力行使につながるだけとはいえません。また、「集団としての性質は必ずしも集団内個人の性質ではない」ことは重要です。虐待を受けて育

った男児が必ず暴力的な犯罪に至るということでは全くない点に注意してください。

一方で、児童虐待を受けた子が親になったとき、児童虐待を繰り返すかどうかは、よく「虐待の連鎖」と呼ばれ有名ですが、その実態はどうなのでしょうか。最初にこのことを主張したオリバーの報告は事例研究でした (Oliver, 1985)。そこでその後被虐待と虐待の因果関係をより正確に明らかにするため、より大規模な調査が行われました。これらの調査をメタアナリシスによって評価したのがアームらによる *Lancet* の報告ですが、結果はまちまちでした。もともと虐待の連鎖を強く検出したハンターらの研究は信頼性が低いとされ、もつとも信用できるとされたウイドムの研究では、虐待を行う率は虐待を受けた子と受けていない子と比べあまり変わらない (男子二・〇%と一・八%、女子〇・二%と〇・三%でいずれも有意差なし) という結果です (Ertem et al. 2000, Widom, 1989)。最近の文献 (Widom et al. 2015) でも、虐待の世代間連鎖が本当にあるというより、発見されやすいバイアスのせいではないかという結論です。従って、不適切な養育環境が子に良い影響を与えないことは確かとしても、たまたま不幸にして発達環境に恵まれない場合でも、その影

響は取り返しのつかないものではなく、虐待を受けて育った子はいい親にはなれないということでは決まっています。

この問題に關連してよく言及されるカスピラによる *Science* の論文 (Caspi et al. 2002) についても触れておきます。モノアミン酸化酵素 A (MAOA) は X 染色体上の遺伝子で、神経伝達物質であるセロトニンなどのモノアミンを分解する酵素をコードしています。この遺伝子の変異をもつマウスは攻撃行動を示し (Caspi et al. 1995)、またヒトにおいて、MAOA 変異をもつ男性は知的障害と衝動的な行動を特徴とするブルーナー症候群を呈します (Brunner et al. 1993)。そこでカスピラは、MAOA 活性の個人差が、幼少期の不適切養育への感受性に影響を与えるのではないかとという仮説を立てました。そして、MAOA 遺伝子のプロモーター領域にあつて遺伝子発現に影響を与える 20塩基の繰り返し配列の数を、四八六人のニュージーランドダニーデン出生時コホートで調べました。すると MAOA 活性が低い遺伝子型をもつ男性は、受けた不適切養育の程度に応じて反社会性行動を起こす率が高くなりますが、活性が高い遺伝子型では、不適切養育の程度が反社会性行動の発生率にあまり影響を与えませんでした。この

ことは、同じ環境にあつても行動への影響が個人によって異なる現象が、MAOA 遺伝子型で説明できる可能性を示唆します。ただし、この論文に対しては、追試できないという論文もいくつか出ていることにも注意すべきです (Huizinga et al. 2006) (Haberstick et al. 2014, Widom & Brzustowicz, 2006)。

6 生育歴の困難が行動発達に与える影響の脳内メカニズム

困難な幼少期を過ごす、非行や犯罪ばかりでなく、うつや自殺、物質依存など、様々なメンタルヘルス問題、さらには肥満や成人病に至るまで、様々な健康上のリスクとなるという報告は多くあります (Felitti et al. 1998)。しかし、それはどのような脳のメカニズムによるのでしょうか。

虐待を受けた子どもの脳の構造や機能を調べた研究は複数あります。たとえば友田らは、虐待種別ごとに大脳皮質灰白質の定量を行い、厳格体罰では右内側前頭前野 (BA10)、左背外側前頭前野 (BA9)、右前部帯状回 (BA24) の体積が一五〜二〇%減少

・ 18) の体積が二二〜一八%減少

・ 暴言虐待では左上側頭回 (BA22)、ウェルニッケ野) の体積が一四%増加

・ DV 目撃では 2 次視覚野である舌状回 (BA18) 体積が六・一%減少

・ 反応性愛着障害を呈している被虐待児では左視覚野 V1 (BA17) 体積二〇%減少

等の結果を報告しています (Tomoda et al. 2009a, Tomoda et al. 2012, Tomoda et al. 2011, Tomoda et al. 2009b, Shinada et al. 2015)。視覚野の体積減少が多く検出されている一方、視覚野が被虐待の結果としての心的影響をもたらしているとは考えにくく、たとえば BA18 体積減少は、DV 目撃の結果、うつ、PTSD、不安障害、摂食障害、人格障害などの症状を呈している場合も、呈していない場合にも認められたとのことです。従って長期に残る虐待の影響をもたらしている原因は別にあると考えられます。不適切な養育の動物モデルとして、親から分離して飼育したマウスやラットの脳を調べた研究も数多くあります。たとえば生後早期に母子分離を繰り返すと、子ラットでは、成体になった際の新奇環境におけるストレス耐性が低下しますが、このストレス耐性の低下には、海馬の

(Weaver et al. 2004) や、扁桃体の GABA 受容体の発現変化 (Weaver et al. 2004) が関与するなど様々な報告があります。この研究を主導したミーニールらによればヒトでの研究もかなり結果が一貫している (Turecki & Meaney, 2016) 一方、そのメカニズムについては議論もあります (Buchen, 2010; Tuves et al. 2003)。結局のところ、まだどの脳内回路が、不適切養育や生後早期社会隔離による影響を直接受けるのか、そしてその後の愛着障害、社会行動の問題やストレス耐性の低下といった行動変容をもたらすのか、十分に明らかとはいえません。その原因として、① 侵襲的な脳内メカニズムの実験はマウスやラットなどの齧歯類を用いて行われることがほとんどですが、霊長類と異なり、齧歯類では生後早期の母親からの分離が、それほど大きな子育てなどの社会行動の異常をもたらさないこと、② 早期環境の影響に関する研究は、環境要因が付加されてかなり時間が経過してから、多くは成体で行われることが多く、数多い変化のどれが早期環境の直接の帰結として起こり、どれがその後起こる二次性的変化なのか、判断が難しいという問題があります。

①の問題解決には霊長類モデルの開発が必要であり、②の問題解決には、母子分離や不適切

養育中から直後の脳内の変化を調べる必要があり、今後の研究に期待されます。

本欄

- Brunner, H. G., Nelen, M., Breakfield, X. O., Ropers, H. H., & van Oost, B. A. 1993. Abnormal behavior associated with a point mutation in the structural gene for monoamine oxidase A. *Science*, **262**, 578-580.
- Buchen, L. 2010. In Their Nurture. *Nature*, **467**, 146-148.
- Cases, O., et al. 1995. Aggressive behavior and altered amounts of brain serotonin and norepinephrine in mice lacking MAOA. *Science*, **268**, 1763-1766.
- Caspi, A., et al. 2002. Role of genotype in the cycle of violence in maltreated children. *Science*, **297**, 851-854.
- Egeland, B., Jacobvitz, D., & Sroufe, L. A. 1988. Breaking the cycle of abuse. *Child Development*, **59**, 1080-1088.
- Ertan, I. O., Leventhal, J. M., & Dobbs, S. 2000. Intergenerational continuity of child physical abuse: how good is the evidence? *Lancet*, **356**, 814-819.
- Felitti, V. J., et al. 1998. Relationship of childhood abuse and household dysfunction to many of the leading causes of death in adults. The Adverse Childhood Experiences (ACE) Study. *American Journal of Preventive Medicine*, **14**, 245-258.
- Fleming, A. S., Vaccarino, F., & Luebbe, C. 1980. Amygdaloid inhibition of maternal behavior in the nulliparous female rat. *Physiology & Behavior*, **25**, 731-743.
- Haberstick, B. C., et al. 2014. MAOA genotype, childhood maltreatment, and their interaction in the etiology of adult antisocial behaviors. *Biological Psychiatry*, **75**, 25-30.
- Huizinga, D., et al. 2006. Childhood maltreatment, subsequent antisocial behavior, and the role of monoamine oxidase A genotype. *Biological Psychiatry*, **60**, 677-683.
- Numan, M. 1974. Medial preoptic area and maternal behavior in the female rat. *Journal of Comparative Psychology*, **87**, 746-759.
- Oliver, J. E. 1985. Successive generations of child maltreat-

ment: social and medical disorders in the parents. *British Journal of Psychiatry*, **147**, 484-490.

- Shimada, K., et al. 2015. Reduced visual cortex grey matter volume in children and adolescents with reactive attachment disorder. *NeuroImage: Clinical*, **9**, 13-19.
- Tomoda, A., et al. 2009a. Childhood sexual abuse is associated with reduced grey matter volume in visual cortex of young women. *Biological Psychiatry*, **66**, 642-648.
- Tomoda, A., et al. 2009b. Reduced prefrontal cortical grey matter volume in young adults exposed to harsh corporal punishment. *NeuroImage*, **47**(2), T66-71.
- Tomoda, A., Polcari, A., Anderson, C. M., & Teicher, M. H. 2012. Reduced visual cortex grey matter volume and thickness in young adults who witnessed domestic violence during childhood. *PLoS one*, **7**, e32528.
- Tomoda, A., et al. 2011. Exposure to parental verbal abuse is associated with increased gray matter volume in superior temporal gyrus. *NeuroImage*, **54**(1), S280-286.
- Tsuneoka, Y., et al. 2013. Functional, anatomical, and neurochemical differentiation of medial preoptic area subregions in relation to maternal behavior in the mouse. *The Journal of Comparative Neurology*, **521**, 1633-1663.
- Tsuneoka, Y., et al. 2015. Distinct preoptic-BST nuclei dissociate paternal and infantile behavior in mice. *The EMBO Journal*, **34**, 2652-2670.
- Turecki, G., & Meaney, M. J. 2016. Effects of the Social Environment and Stress on Glucocorticoid Receptor Gene Methylation: A Systematic Review. *Biological Psychiatry*, **79**, 87-96.
- Turnell, A., & Essex, S. 2006. *Working with "Denied" Child Abuse: The Resolutions Approach*. Open University Press. (井上薫(監訳) 二〇〇八 児童虐待を認める親への対応——ランリトーン・メンズマンローナーと家族の再統合 明石書店)
- Twines, F. A., Steffenach, H. A., Murison, R., Moser, M. B., & Moser, E. I. 2003. Selective hippocampal lesions do not increase adrenocortical activity. *The Journal of Neuroscience*, **23**, 4345-4354.
- Weaver, I. C., et al. 2004. Epigenetic programming by mater-

nal behavior. *Nature Neuroscience*, **7**, 847-854.

- Wisdom, C. S. 1989. The cycle of violence. *Science*, **244**, 160-166.
- Wisdom, C. S., & Brzustowicz, L. M. 2006. MAOA and the "cycle of violence": childhood abuse and neglect, MAOA genotype, and risk for violent and antisocial behavior. *Biological Psychiatry*, **60**, 684-689.
- Wisdom, C. S., Czaja, S. J., & DuMont, K. A. 2015. Intergenerational transmission of child abuse and neglect: real or detection bias? *Science*, **347**, 1480-1485.
- Wisdom, C. S., & Maxfield, M. G. 2001. *An update of the "cycle of violence"*.
- 黒田公美 & Memmo, R. K. 二〇一七 攻撃性の脳内基盤——臨床精神医学 第四十六号 一〇五七-一〇六六頁
- 黒田公美・白石優子・篠塚一貴・時田賢一 二〇一六 子どもの虐待はなぜ起るのか——親子関係の脳科学 加藤純史(編) ナリキドバウから一脳二ライフ 日本評論社 一六-二四頁
- 篠塚一貴・矢野沙織・Memmo, R. K.・黒田公美 二〇一七 攻撃性の脳内基盤Ⅱ 臨床精神医学 第四十六号 一〇六七-一〇七六頁
- 森田ゆう 二〇一八 虐待・親ごめんを 築地書館

▼お知らせ

二〇二〇年生まれ。理化学研究所脳神経科学研究センターチームリター。メンタルヘルス問題のある親の子育て支援の支援——先駆的支援活動例に関する「まなび」機能」(共著 篠塚一貴、福村出版)「つながる脳科学」(共著 講談社ブルーバックス)。

▶おまげ

二〇〇五年生まれ。理化学研究所脳神経科学研究センター研究員。「メンタルヘルス問題のある親の子育て支援」の支援——先駆的支援活動例に関する「まなび」機能」(共著 福村出版)「共有する子育て——沖縄多良間島のヒロメザリンガに学ぶ」(共著 金子書房)。

特集 虐待対応のこれから

Ⅱ 虐待の早期発見と支援のあり方

保育所における虐待がうたがわれる子ども・保護者への対応

大阪医科大学講師 久保樹里

1 保育所に求められる役割

子どもの虐待の予防や発見、そして対応において保育所は重要な役割を担っています。私がかつて児童相談所において多くの虐待事例に対応してきましたが、乳幼児の場合、保育所の存在は大きいものでした。対象の子どもにも所属機関があることはそこでも子どもの状態を把握できることであり、その機関とやりとりをしながら、子どもと保護者を支援することができます。同様の理由で、施設や里親宅から子どもの家庭引き取りを進める際にも保育所に入所できること

は引き取りを促進するポイントとなりました。

今、保育所の役割は拡大しています。平成二九年度に改正された保育所保育指針によると、「保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う」とされています。つまり入所する子どもの保育とその保護者の支援に加え、地域も保育所の支援対象となっています。また、平成二九年に厚生労働省が出した「新しい社会的養育ビジョン」においても、「保護者支援、子育て支援の向上に向けて、保育所等におけるソーシャルワークの機能について」言及されています。子ど

も家庭のニーズに応じた在宅支援サービスの在り方において、保育所は大切な機関となっています。しかし、研修などで保育所長の方々に目にかかると、実際の保育現場は保育者不足と経験の浅い保育者の増加により、制度や指針として示されるものをどのように現場で実現しているのか苦労しているというお話を聞きます。そして、悩みながらもさまざまな工夫や実践をされていることも知りました。本稿では、それらのお話を参考に虐待について保育所において気をつけるポイントを取り上げてみます。

1 予防のためのかかわり

事例1 二歳児のAちゃんのお母さんは同い年の子どもたちと比べてAちゃんの発達が遅いのではないかと気にしています。Aちゃんが泣いて抱っこをせがんでも、「しっかり立って」がお母さんの口癖になってきました。お母さんは学生時代、そして仕事についてからも計画を立てて、それに向かって努力してきた人です。ところが妊娠・出産・子育てはそのとおりにいかず、不妊治療の末、やっとAちゃんを授かりました。最近はお母さんが迎えに来て、Aちゃんはすぐにお母さんのところに行かなくなりました。保育者はお母さんの不安を受け止めて、つな